

特集・館蔵資料の研究と紹介 【論 文】

江戸湯屋建築の復元的研究

米 山 勇*

目 次

- はじめに
- 1 一階の復元
- 2 二階の復元
- 3 外観の復元および立体化への試論
- おわりに

キーワード 建築 都市 「建築—都市」史 復元 復原 湯屋 風呂 銭湯 二階
町屋 柘榴口 「守貞謾稿」 『風俗画報』 「皇都午睡」

はじめに

江戸の銭湯＝湯屋^{ゆや}について語るとき、参考文献として第一にあげるべきは、喜多川守貞による「守貞謾稿」であろう。本書は、著者自身の見聞及び諸書の読解に基づいた江戸風俗の考証を京坂との比較をまじえながら挿図入りで綴ったものであり、「巻之二十五 沐浴¹⁾」における詳細な記述は、江戸時代の入浴文化に言及する際のもっとも重要な資料である。また『古事類苑居処部²⁾』も、『江戸繁昌記』、「皇都午睡」、『嬉遊笑覧』、『骨董集』等の諸文献における湯屋に関する記述を集め掲載しており、資料価値が高い。

一方、日本の入浴文化に関しては今日まで様々な論考や文献が発表されており、それらの多くは江戸の湯屋にも言及している。しかしその建築的な特質については、例に洩れず前述の「守貞謾稿」に描かれた挿図を図版として引用しながら論考を進めている。このことは、当該書の比類ない情報密度によるものもあろうが、それ以上に江戸の湯屋に関する建築図面の類が、これまで見いだされなかったことに帰結するといっていよいだろう。

今回、当館の調査研究専門第1グループ（歴史—近世史）とともに学際的論考の対象とする「江戸湯屋文書」は、湯屋の一階平面図だけでなく、二階平面図及び断面図をも包含したものとして、きわめて興味深い資料である。また、東京大学法学部法制史資料室の吉田家文書にあ

* 当館専門研究員

る仕様注文書（原資料紹介参照）は、若干の差異こそあれ、ほぼ図面の記載内容と合致しており、そこに描かれた湯屋について記述したものと考えてよい。

本稿は、江戸東京の「建築—都市」史研究の一環として、江戸湯屋文書図面および前掲関連資料の読解と復元図の作成を通じ、これまで「守貞謄稿」の挿図によってしか把握し得なかった江戸湯屋の建築的様態をより明確かつ詳細な形で提示しようとするものである。

1 一階の復元

本稿で対象とする江戸の湯屋（以後、＜江戸湯屋＞）は、切妻造り瓦葺き二階建てで、一階みせ部分の規模は桁行6.5間・梁間7.5間である。一階の復元平面図を論文末に示す（図面1）。

＜江戸湯屋＞一階は、男湯と女湯からなる。「守貞謄稿」によれば、上方においては「天保府命後、男女各浴槽ヲ別ニス」ようになり、それまではほとんどの銭湯が男女入込（混浴）の状況であった。また、「浴槽ヲ別ニス」といっても洗い場は男女共有であったことが、添えられた挿図（図1）からうかがえる。一方、江戸においては、寛政3年（1791）に以下の禁令が出された。

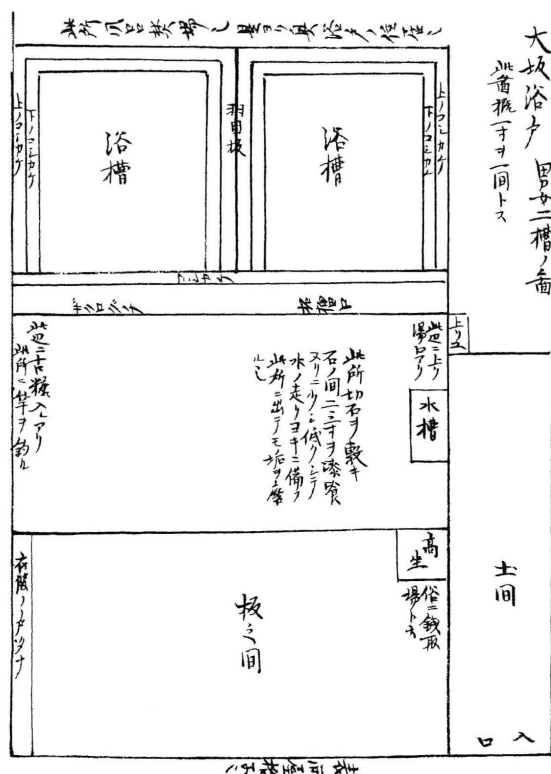


図 1

男女入込湯停止

町中男女入込湯之場所有之、右者大方場末之町々多有之間（中略）場所柄相応之所ハ入ニ焚候儀、仕来とは乍申、尚以如何ニ候、尤是迄刻限を以相分、又者日を分、男湯女湯と焚来候者も有之候、刻限ニ而まきはしく候間、以来場所柄ハ勿論、場末たり共、入込湯ハ一統ニ堅ク停止せしめ候（後略）⁴⁾

しかし、ここで禁止されている混浴は松平定信の引退後間もなく復活し、実際は、天保の改革以後、ようやく全国的に男女混浴は禁止となったようである。⁵⁾

さて、男湯・女湯の配置については、＜江戸湯屋＞では正面向かって右側を男湯、左側を女湯としている。「守貞謾稿」に描かれた挿図（図2）はそれとは逆に、左が男湯、右が女湯であるが、同書には以下の記述がある。

江戸ハ、從來男槽女槽を別ツ。故に、天保前後、浴場ノ制無異也。蓋右図、右女左男トスレドモ、或ハ、右男左女湯モアリ。又ハ、間口廣カラズ、奥行ノ長キ物ハ、表ニ男湯、路地ヲ入テ、裡ニ女湯ヲ建ルモアリ。（傍点筆者）

このように、男湯女湯の左右配置は決まったものではなく、敷地の間口が狭い場合には、手

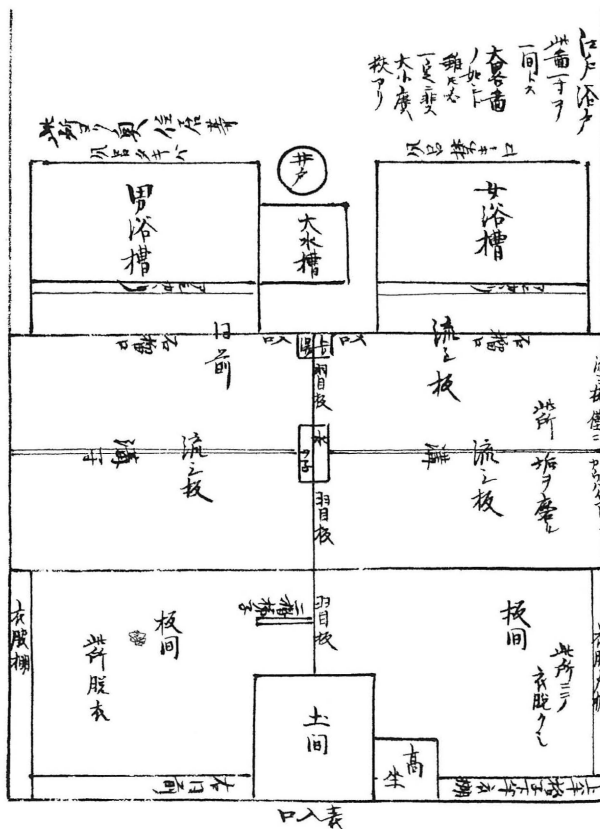


図 2

前を男湯、奥を女湯というように、両者を縦列させる場合もあったようである。

建物内部への(出)入口は前掲書の図とは異なり、男湯女湯それぞれに設けられ、その間に番台が置かれる⁶⁾。このような入口の構成は、同書における別図(図3)の形式に合致している⁷⁾。「多クハ戸口ヲ異ニスル也」の記述から、湯屋の戸口形式としてはより一般的なものであったのであろう⁸⁾。

<江戸湯屋>の入口から土間に入るとまず興味深いのが、3つの番台の存在である。つまり中央にある通常の番台とは別のやや小振りな番台が、男湯女湯それぞれに置かれている。この意味については、前掲書に「三都トモ、夜ハ、高座ノミニテハ、衣服ノ出入ヲ監ルコト難キヲ以テ、板間ニ一人、副監ヲ置ク」とあることから推察される。湯屋の板の間は、他の浴客の着物を盗む泥棒(湯屋盗人・湯泥棒)が暗躍する場所であった⁹⁾。<江戸湯屋>ではおそらく湯銭を徴収する中央番台の他に、防犯の意味で、男女それぞれやや小ぶりの番台を設け、監視役の人間をおいたのではないかと考えられるのである¹⁰⁾。

土間から拭板(杉)敷の脱衣空間に上がると、男湯のみ上り階段が備えられている。これは、いわゆる「湯屋の二階」(後述)への段梯子であり、『風俗画報』に「二階へ登る梯子は男湯女湯の境とす(中略)但女湯より二階に登ることを得ず¹¹⁾」とあるように、女湯にはけっして設置されることのなかったものである。平面図及び断面図から算出すると、幅が約4尺(約120cm)、踏み面が約8寸(約25cm)、蹴上げが約1.3尺(約40cm)となる。今日の基準からすると急な階段であるが、当時、湯屋の二階への段梯子としてはごく一般的な部類のものであったであろう。

脱衣場の内側には下足棚、外側には衣類を収納するための戸棚が設置される。「守貞謾稿」によれば、上方の銭湯の戸棚は「扉ヲ付ル片扉」(図4)であり、しばしば鍵が用いられた。一方、江戸の湯屋においては、扉のないものや片扉のもの、引き違いのもの(図5)などさまざまな

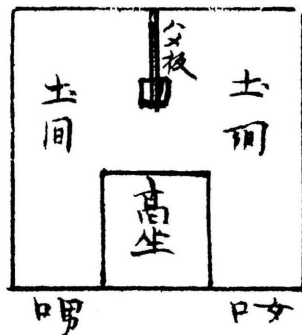


図 3

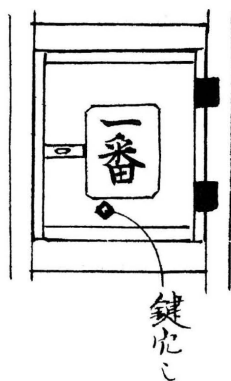


図 4

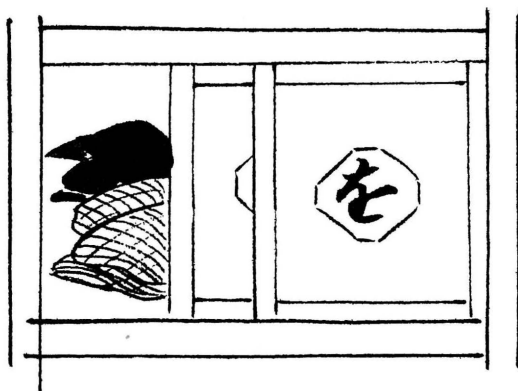


図 5

形式の戸棚がみられた。＜江戸湯屋＞の場合、仕様注文書に「左右柵戸棚御絵図面之通り仕、尤引戸之分古物持相ニ¹²⁾

脱衣空間と流し場の間に空間的境界（建具）はない。これは江戸の湯屋としてはごく一般的な空間構成であった。汚水の流れる溝、「小流し」をまたぎ、流し場へ足を踏み入れる。流し場は脱衣場と同様に板張りで、排水のための勾配を持つ。男湯と女湯は石積みの基礎部をもつ中仕切りによって仕切られるが、排水溝は中仕切りを貫通していたであろう。

流し場には男女湯各々円形の「水」（水槽）が設けられ、中仕切り奥の男女湯境には台形の湯槽（図面1のA）らしきものがみられる。これらはそれぞれ、前掲書の挿図における「水フ子」（水舟）、「上り湯」（上がり湯）に相当するものと思われる。さらに奥側には、大きな「溜池」と2つの「井」がある。これらは同様に「大水槽」、「井戸」のことであろう。ここで注意すべきなのは、「男風呂」「女風呂」それぞれの内側に小さな湯槽らしきもの（図面1のBおよびB'）が描かれている点である。おそらくここには、湯汲み男（女）が存在したであろうと思われる。当初、上がり湯は「湯汲み男（女）」（図6）と呼ばれる者が、客の求めに応じて柄杓で小桶に入れてやっていた。それが後に人件費の節約からセルフサービスとなり、男女の流し場の中仕切りの中ほどに両側から使える湯槽となった。¹³⁾ 一方、＜江戸湯屋＞の場合、客が自分で汲むことのできる上がり湯の他に、湯汲み男（女）が客の注文に応じて汲むための上がり湯が別に用意されていたのではなかろうか。つまり＜江戸湯屋＞は、湯汲み男（女）による上がり湯から客のセルフサービスによる上がり湯への過渡期的な性格を備えていたと考えられるのである。

「男風呂」「女風呂」と書かれた部分は男女の浴槽であり、それぞれ背後に「火袋」（炊き場）を従える。浴槽の間口寸法は男湯が1丈、女湯が8尺である。この値は『江戸繁昌記』等における「九尺四方」の記述に概ね合致している。

さて、江戸で最初の銭湯と伝えられる銭瓶橋

の銭湯（天正19・1591）の風呂は、蒸風呂であった。また、江戸時代を代表する銭湯の入浴方式は「戸棚風呂」と呼ばれ、浅い水槽の上部を壁で囲い湯気を逃がさないようにして、湯浴と蒸気浴とを同時に行う方式のものだった。ただ、戸棚風呂のように入口が引き違い戸では、戸を開けたときに蒸気が逃げってしまう欠点があり、銭湯のように多人数での入浴には適さなかつ



図 6 裏側からみた湯くみ場。

た。そこで考案されたのが¹⁴⁾柘榴口と呼ばれるものである。これは戸棚風呂の入口部分を改良し、引き違い戸のかわりに鴨居を下から三尺ほどの低い位置まで下げ、そのやや奥に浴槽を置くものである。¹⁵⁾この柘榴口は内部が薄暗く、湯気が立ち込めてほとんど何も見えない上、水量も少なく、入替えも多くなかったので、衛生上の問題から明治17年に禁止された。¹⁶⁾

さて、＜江戸湯屋＞の平面図をみると、「男風呂」「女風呂」の手前に細長い矩形の材が描かれている。建築年代から考えても、これが柘榴口を表現したものである可能性が考えられるが、平面図にはとくにその名称は記載されていない。一方、仕様注文書を見ても「柘榴口」の文字は見いだせないが、「男女前掛け」と記された箇所（原資料紹介 参考1）の記述内容は、部材名称などから考え、柘榴口の特質と近接している。他にこの記載内容と合致する構成要素を見いだせないことから、ここで言う「前掛け」が「柘榴口」に相当する可能性もあろう。¹⁷⁾「守貞謄稿」によれば、柘榴口の形状は上方と江戸で異なる（図7、8）。上方で見られる（唐）破風状の

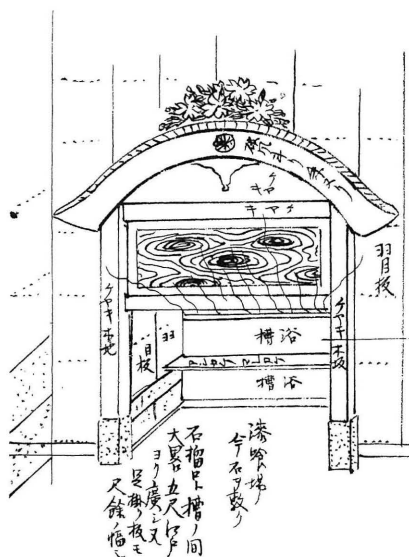
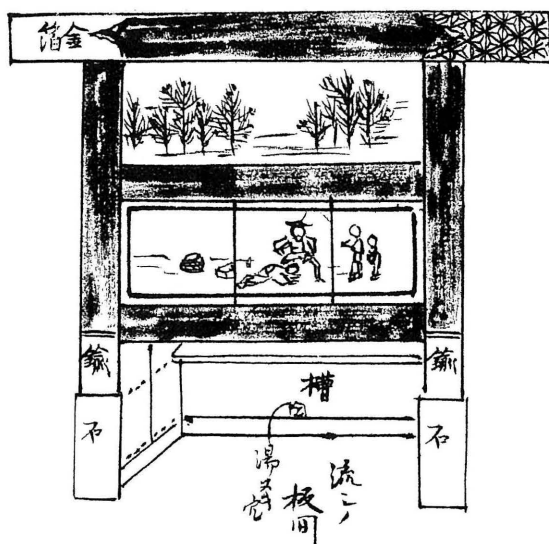


図 7



江戸浴戸、柘榴口之図

図 8

¹⁸⁾柘榴口は江戸では稀で、多くは粗華表（鳥居）に似たものであるとしている。¹⁹⁾＜江戸湯屋＞の仕様注文書における「前掛け」を柘榴口とするならば、その記載内容から形態は後者、すなわち鳥居状であると判断できる（図面4参照）。

最後に、男湯女湯それぞれの広さの比較であるが、前掲書で描かれた図では、浴槽こそ男湯がわずかに大きい、その他の箇所は男女でほとんど変わらないといえる。一方＜江戸湯屋＞では、男湯と女湯とで面積差が著しく、浴槽から洗い場、土間に至るまで差別化が図られている。²⁰⁾このことだけから、前掲書に描かれた湯屋との年代関係を導くのは早計であろう。しかしながら、＜江戸湯屋＞において男性上位の志向がより顕著に表出されていることを指摘するこ

とは可能かもしれない。

2 二階の復元

江戸湯屋文書の大きな特質の一つは、二階の平面図が添付されていることである。いわゆる「湯屋の二階」は、江戸銭湯につきものの設備として、広く知られてきた(図9)。これは明暦の禁制で湯女風呂が禁止された後に生まれた男客のためのサロンであり、湯上がりの客に茶菓子²¹⁾を勧め、囲碁、将棋などの娯楽用具をしつらえたものである。この「湯屋の二階」については江戸銭湯を象徴するものとして、多くの文献において言及されてきたが、そのもっとも詳しいもののひとつが、西澤一鳳の「皇都午睡」であらう²²⁾。

(前略) 此傍に二階へ上る大段階子有。二階は男湯のみにて高欄付二階より往來を見おろす。座敷には隔なく碁将棋の閑屋に似たり。中央に二階番頭素湯を釜にたぎらせ客の顔を見れば煎花を拵へもち来る。前に菓子羊羹など重に入有。爪取鉢簾など傍に置有。贅沢者はずつと這入て二階へ行。二階に着物脱入る戸棚有。是へ脱。湯代と手拭を持階子を下りて銭を置。入湯して上つてゆると骸を乾かす。茶を持来る菓子を喰茶をのみ爪など取



図 9

てゆるりとして着物を着る。前にいふ茶店にて休まんより遙安上りにてゆるりとす。近辺の若もの勤番の侍衆などは此二階にて遊び碁将棋盤有て温泉湯治場の如し。

また『江戸府内絵本風俗往来』では、建築的な事柄にも若干ふれながら、次のように記している。²³⁾

二階は甚だ手廣くして表の方掃出縁に作り恰も酒樓が妓樓に髣髴たり。梯子段を登終るや正面に客用の下駄段ありて客下駄を携へ登りて其段へ置く。二階番頭とて親爺一人小高所を出來梯子の上口下駄段に向へる所に茶釜火爐ろ茶碗土瓶等の茶道具を前に控へて座せり。座の左右には台の上に菓子しゆつらいの箱を置く（中略）

寄席の噺芝居相撲の評判より前夜の火事遊芸の師匠つひの噂等は絶間なく囲碁将棋の下手連中あり口軽の舌戦あり。朝湯に入らんとて終に午飯ひるめしの迎ひをうけ初めて驚きて帰宅するなど日々の事なり。正月は猶更心ゆるして二階の楽たのしみ 恰も温泉場の浴客の如し。夏は涼風に富冬は温暖の得あり。

このように「湯屋の二階」については、主として風俗面から記述された文献からその生き生きとした様子をつかむことができる。しかしその一方、「湯屋の二階」の建築的な様態については、たとえば「守貞謾稿」にも挿図が添付されておらず、前掲のように記述されたものや、幾つかの浮世絵などによってその一端を垣間みるしかなかった。江戸湯屋文書からは、「湯屋の二階」の具体的な間取りを知ることができる。

＜江戸湯屋＞の二階復元平面図を文末に示す(図面2)。また、一階と二階の重層関係を図面3に示す。二階へは、前述のように男湯の洗い場に設けられた階段からアプローチする。

階段を上がると拭板敷きの廊下に出る。正面には下足棚が備えられており、それと相対する位置(建物正面側)に番台が置かれる。このような構成は、『江戸府内絵本風俗往来』における「梯子段を登終るや正面に客用の下駄段あり」、「二階番頭……小高所を出來梯子の上口下駄段しゆつらいに向へる」といった記述に合致する。

階段をはさんで左が9畳、右が11畳の座敷である。ここで11畳の座敷のみ「板天井」の記述があることから、9畳の方は化粧屋根裏であった可能性があろう。また11畳の部屋は広い戸棚を持ち、廊下の外側に格子(あるいは連子)窓を持つことから、こちらの方が主要な座敷であったのかもしれない。これらの二室は「皇都午睡」の「座敷には隔なく」の記述通り、間仕切りはなく、拭板敷きの広い廊下をはさんで大広間を構成している。このような大空間こそが、「此二階、必らず狭カラザル故ニ、囲碁稽古、或ハ活花稽古ナドノ席ニ貸之(中略)稽古アル日モ、浴客ハ常ノ如ク也。或ハ、拳ノ稽古モアリ。毎浴戸、有之ニハ非ズ」²⁴⁾、あるいは「月並俳諧の優秀句が壁に貼り出されることもあった」²⁵⁾という、開かれた社交場としての特質を成り立たせたのだろう。

9畳の座敷の左側には手前から3畳の座敷、そして同規模の物置が縦列している。原図からは続き間のようにも見えるこれら2室であるが、物置の出入口として廊下に面して引き戸が用

意されていることから、2室の間は壁で仕切られていたのではないかと思われる。建物全体の途中でこの筋にのみ半柱（図面2のA）が備えられている点にも注意すべきであろう。

3畳と9畳の境には襖（障子）4枚がしつらえられ、3畳には板天井が張られる。また、この空間には外部への開口がなく、11畳、番台、9畳の正面側に一列に並ぶ引き違い障子が、この部屋でのみ切れている。これらのことは、この3畳が二階全体の中でも特異な部屋であることを暗示する。おそらくここは、ある程度の隔絶性＝プライバシーを保有する特別な座敷であったのだろう。

一列に並んだ障子を介して廊下に出る。人々は、ここから出格子を通し、「往來を見おろ」したのであろうか。

3 外観の復元および立体化への試論

江戸湯屋文書において、二階平面図とともに興味深いのが「湯屋御見世建地之図」、すなわち断面図の存在である。この図面は少なからず省略がみられ、今日の建築設計図面における断面図ほどの精密性はないが、従来得ることのできなかった湯屋の立体情報を提示するものとして、大きな意味を持つ。ここではこれまで述べてきた一、二階についての平面的考察と合わせ考えることにより、建物の外観をふくめた立体像を復元し、図の制作を試みてみたい。

一階は正面左右に出格子が設けられ、向かって左側の出格子の外にはさらに駒寄せ²⁶⁾が置かれる。二階の正面は全面を出格子とし、左右両端に戸袋が備えられる。一方、断面図によれば建物は切妻造り平入り²⁷⁾で、屋根に勾配はない。仕様注文書から葺材は瓦であり、おそらく棧瓦葺と推察される。また軒の形式は腕木が壁筋より張り出し、前面で桁を受ける出桁造りである。このような特質は、建物の随所にみられる格子や障子とともに、＜江戸湯屋＞において伝統的な町屋の建築形式が継承されていることを示している。

東京の銭湯について考えるとき、多くの人がまっさきに思い浮かべるのは、「大黒湯」（昭和4）や「子宝湯」（同、写真1、2²⁸⁾）に代表されるような寺社風の外観であろう。千鳥破風や入母屋破風と唐破風の重層、厳格な左右対称性、過剰なまでの彫刻といった性格は、あたかも江戸の湯屋から継承された伝統的な特質であるかのように判断しがちである。しかし、実際にはそのような造形は関東大震災以後に流行したものであり、明治期には見られなかったものである（図10、写真3）。このような意匠は、建築史的にはいわゆる「近代和風」の範疇に分類すべきであることに注意しなければならない。³⁰⁾

復元考察の結果を文末に示す（図面4～6）。



写真1 子宝湯（昭和4、江戸東京たてもんの園収蔵）



写真2 同上 入母屋破風(上)と唐破風(下)（筆者撮影）

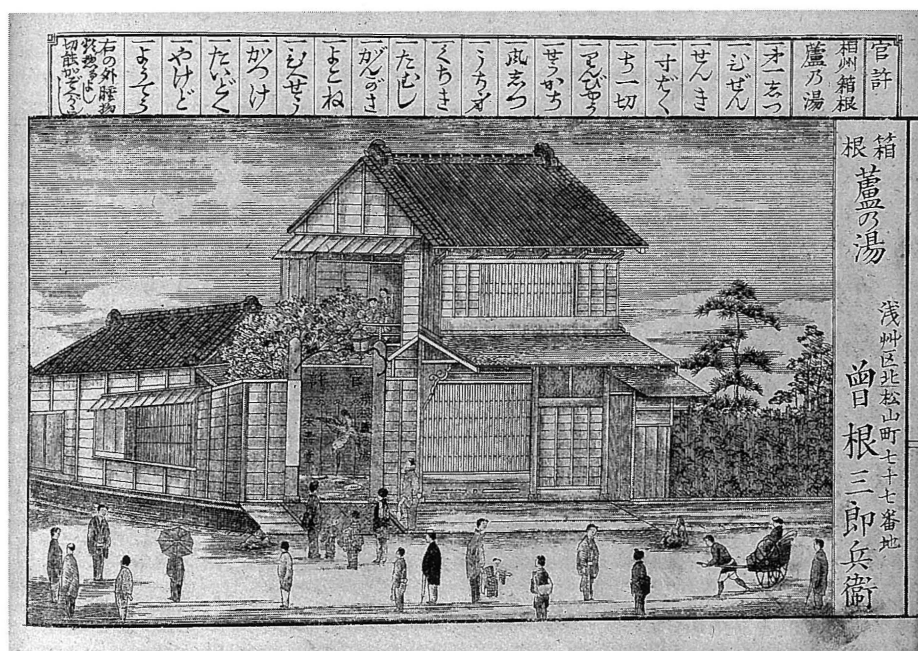


図 10

おわりに

以上、＜江戸湯屋＞の資料読解を通じ、一階平面図、二階平面図、アイソメ図、透視図を作成することにより、従来不明瞭であった江戸湯屋の建築的様態を明らかにした。本稿が、「守貞謄稿」をはじめとする、江戸の湯屋に関する先行研究の成果を補完し、今後、同様の考究がなされる際の資料として活用されるならば、これに勝る喜びはない。

また江戸東京博物館には、今回対象とした資料の他にも、建築図面の類が少なからず収蔵されている。今後、それらの一つ一つについて同様の論考を重ねていくことにより、江戸東京における「建築—都市」史の具体像を明らかにしていきたい。

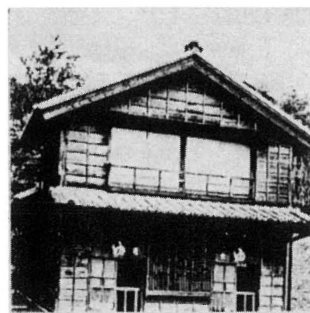


写真3 東湯（博物館明治村収蔵、明治期・筆者撮影）

〔註〕

- 1) 『守貞謄稿』第4巻、1992年、東京堂出版、39—72頁。
- 2) 『古事類苑 居処部』、1979年、吉川弘文館。
- 3) 江戸東京の歴史を、建築が都市をいかに形成してきたか、すなわち建築と都市の有機的連関の系図として描くならば、個々の具体的な建築についての分析を重ね、その総体としての歴史像を提示することが肝要であろう。本研究はそのような問題意識に立脚し、従来の「建築史」と「都市史」を

総合する体系としての「建築—都市」史を提唱するものである。なお、波多野純氏の一連の業績は、具体的な建築の考察を通じて江戸の街並みを復元した先行研究の成果として、重要である（『復原・江戸の町』、1998年、筑摩書房等）。また、伊藤毅氏の提示する「都市建築史」、あるいは「建築群像史」といった概念（「都市史から都市建築史へ」『建築雑誌』1997年5月号、68頁）も、本研究の問題意識に通底するものとして、尊重したい。

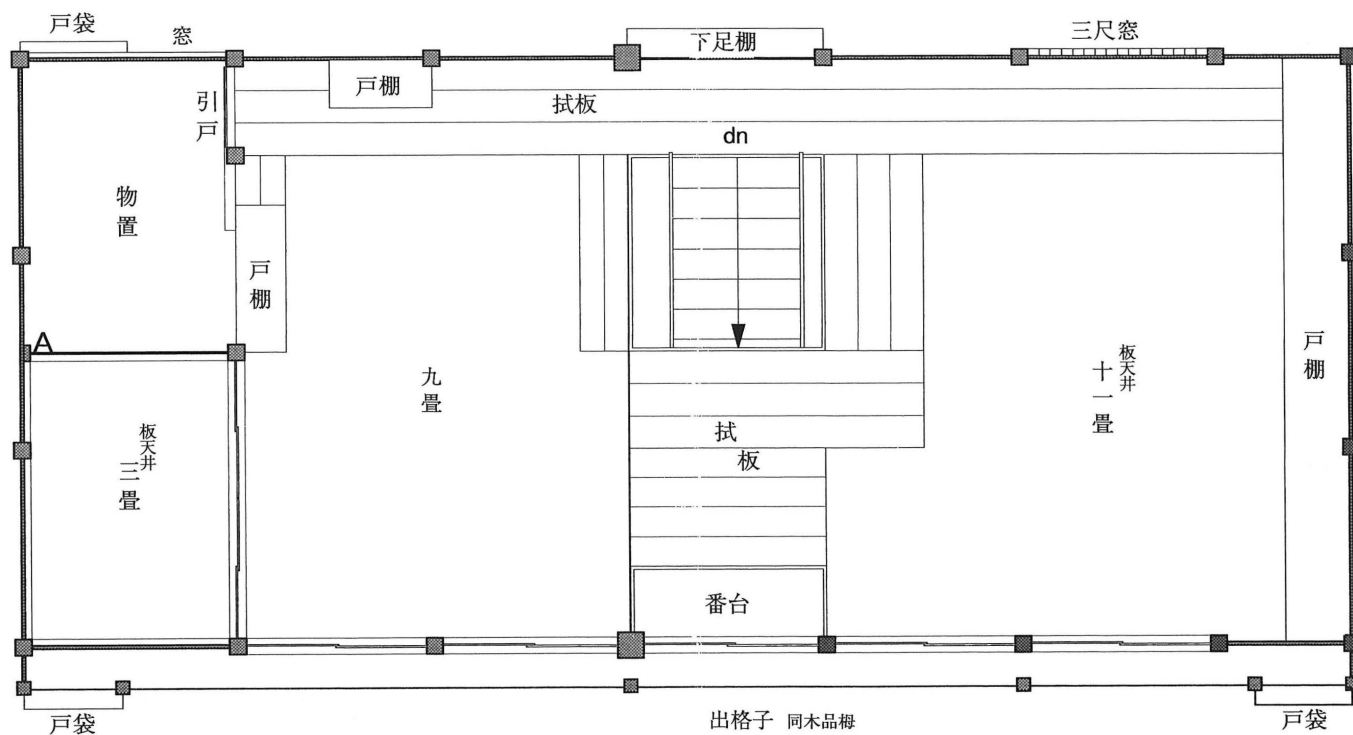
- 4) 石井良助編『徳川禁令考 前集第五』、1959年、創文社、437頁。
- 5) 西山松之助「風呂屋」『国史大辞典 第12巻』、1991年、吉川弘文館、374頁。
- 6) 番台については「守貞謾稿」では「高座」、「皇都午睡」では「銭取場」と呼称している。
- 7) 挿図（図2）のような戸口の形式については、「表戸口、右図ハ、男女戸口ヲ別ズ。一戸ヲ以テ兼ル者也。稀に是アルコトニテ、多クハ戸口ヲ事にスル也」との記述が為されている。
- 8) 「皇都午睡」にも「湯屋の門口に男湯女湯と並び有りて、此二つの入口をば入りし所の真中に、内の方をむき銭取場有り」との記述がある。
- 9) 神保五弥『浮世風呂—江戸の銭湯』、毎日新聞社、1977年、83頁。なおこのような泥棒は「板の間働き」とも呼ばれていた。
- 10) 仕様注文書によれば、中番台の木種は楓、左右番台は松である。
- 11) 『風俗画報』第312号、明治38年3月。なお、菊池貴一郎は著書の『江戸府内絵本風俗往来』の中で、「湯屋の二階」として、これとまったく同じ記述をしている。菊池は『風俗画報』の読者であり、『江戸府内絵本風俗往来』の発行所も『風俗画報』と同じ東陽堂であった（鈴木棠三「解説」『絵本江戸風俗往来』、平凡社、1965年、287頁）ことから、そこでの記述は、『風俗画報』の記事を引用したものであると思われる。
- 12) 『江戸繁昌記』には「注^{ちゆうりゆう} 霽^{ことごと} 間、尽く板地^なを作して澡洗所^{そうせんじよ}と為す。半に当りて溝^{こう}を通じ、以つて余湯を受く」の記述がある（『江戸繁昌記1』、1974年、平凡社、234頁）。なお、当書では「混堂^{ゆや}」と記載している。
- 13) 山田幸一監修、大場修『物語ものの建築史 風呂のはなし』、鹿島出版会、1986年、66頁。
- 14) 山東京伝は、柘榴口の名称の由来について「屈み入ると云ふを鏡鑄ると云うにとりなしたる也。昔は鏡を磨くに柘榴の実の醋を用いたる故也、今は梅の醋を用ゆ」と述べている（『骨董集』、文化10年）。
- 15) 前掲『物語ものの建築史 風呂のはなし』、69頁。
- 16) 花咲一男、町田忍『「入浴」はだかの風俗史』、講談社、1993年、94頁。
- 17) ただし、「前掛り」なる呼称の一般的な用例は、現在のところ文献などからは確認できていない。
- 18) ただし、上方では「柘榴口」の呼称を知る者は稀であると記述している。
- 19) 実際には『賢愚湊銭湯新話』など、挿絵で見ると破風状のものを指摘し得る。
- 20) 博物館明治村に収蔵されている東湯（明治期、写真3）は、男湯女湯とも同面積。また後世の建築であるが、江戸東京博物館分館江戸東京たてもの園に収蔵されている子宝湯（昭和4、写真1、2）も基本的に同様である。なおく江戸湯屋>において、建物の奥側、すなわち火袋側の部分のみ女湯の面積が広く取られているのは謎である。
- 21) 松平誠『入浴の解体新書』、小学館、1997年、174頁。
- 22) 『新群書類従』第一、1906年、721頁。
- 23) 前註11参照。
- 24) 前掲『守貞謾稿』、57頁。
- 25) 前掲『浮世風呂—江戸の銭湯』、89頁。
- 26) <江戸湯屋>の場合、女風呂側にのみ駒寄せが設けられているのは興味深い。
- 27) 屋根形式については入母屋、あるいは寄棟の可能性もあろう。
- 28) 前註20参照。
- 29) <江戸湯屋>の場合、断面図に千鳥破風らしきものは描かれていない。また建物は平入りであるか

ら、正面の入母屋破風はあり得ない。

- 30) ただし、浴室と唐破風の関連性については、東大寺大湯屋浴室（1239）、西本願寺飛雲閣浴室風呂屋形（年代不詳）、妙心寺浴室（1587／1656）外観及び風呂屋形などの事例を指摘することができ、それらが震災以後の銭湯の意匠に少なからず影響を及ぼした可能性も考えられる。

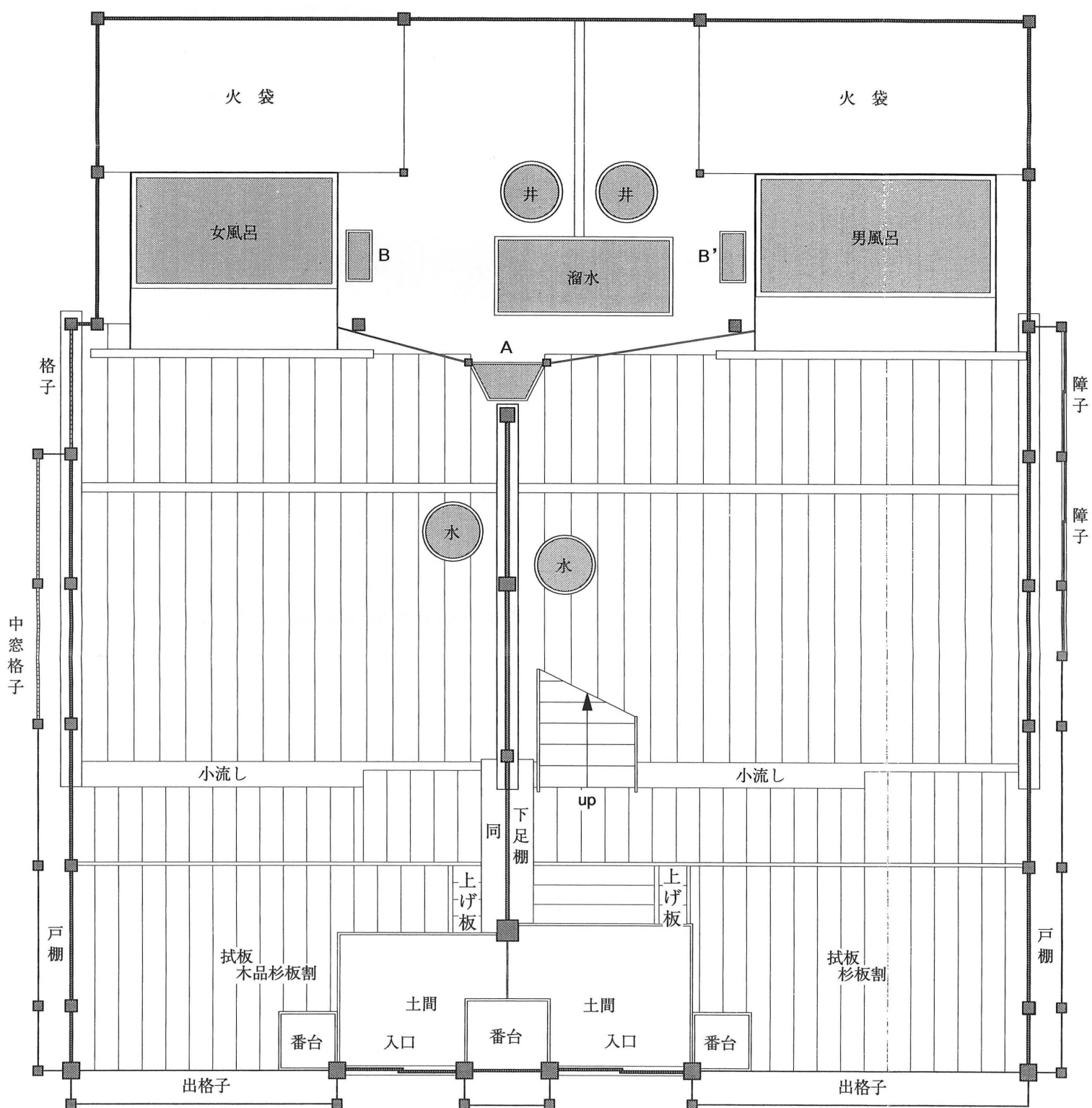
※本稿中に掲載した図の出典及び所蔵機関は以下のとおりである。

- ・図1～5、7～8 「守貞謄稿」巻25、国立国会図書館所蔵
- ・図6、9 『賢愚湊銭湯新話』、国立国会図書館所蔵
- ・図10 『東京商工博覧絵』第2編下、館蔵資料番号93200396

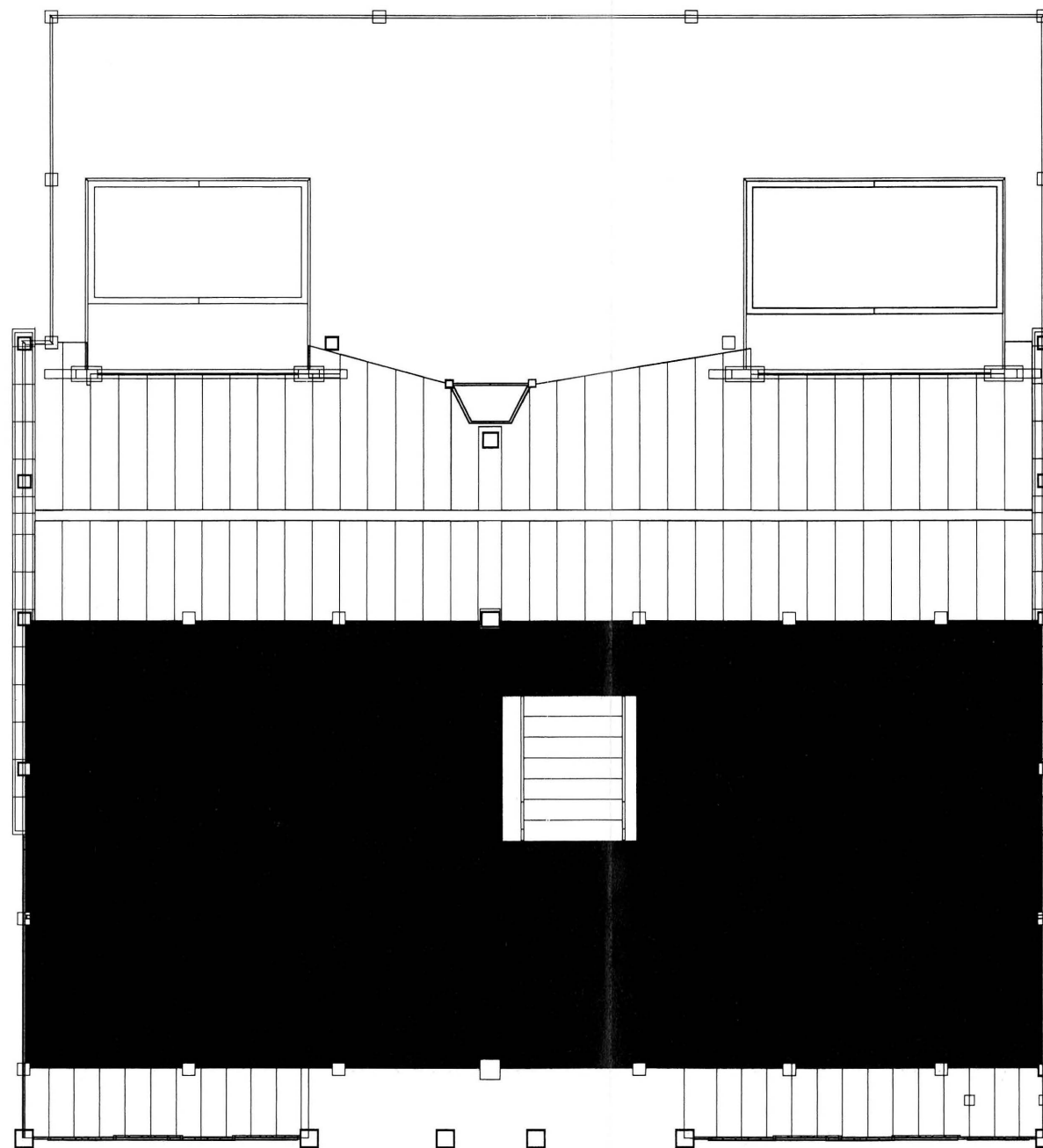


図面 2 <江戸湯屋> 2 階平面図

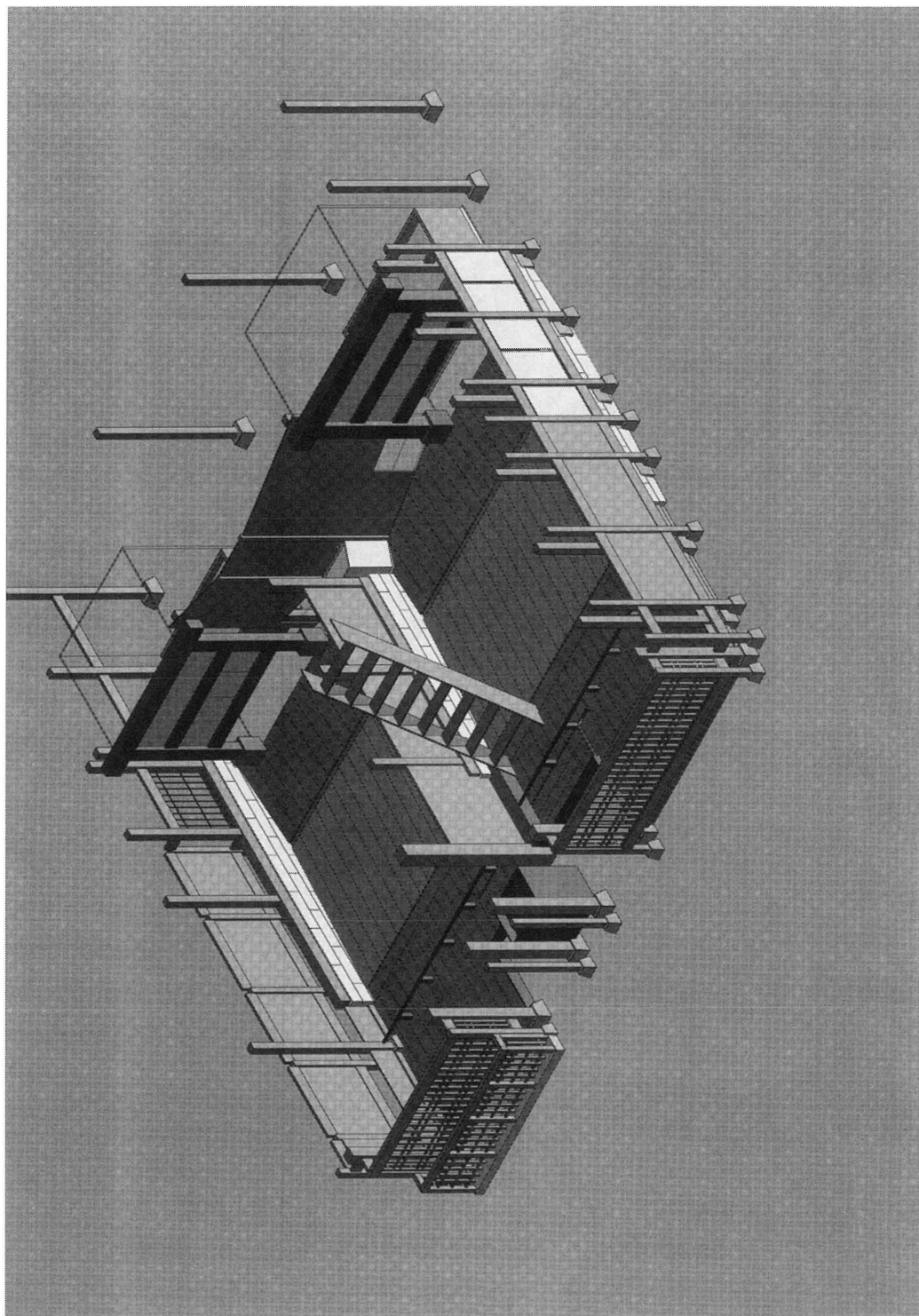
0 1 2 3 4 5 10尺



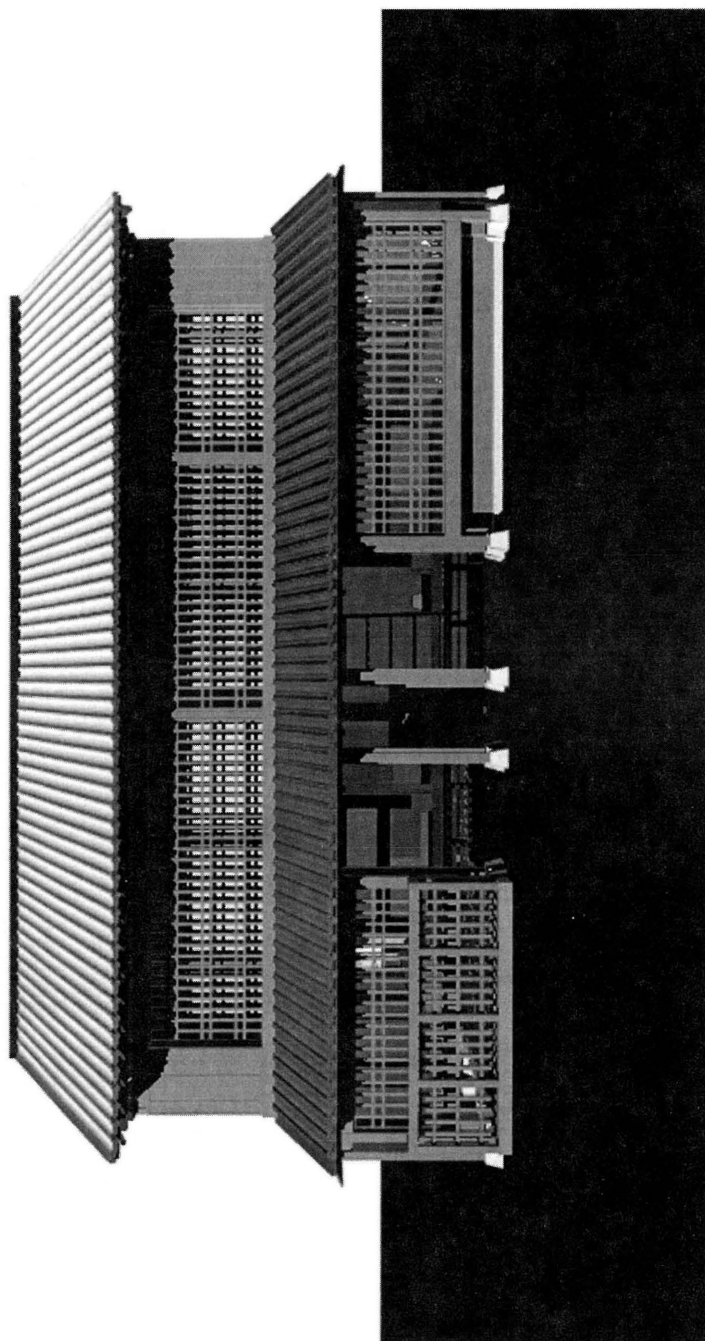
図面 3 <江戸湯屋> 1 階平面図



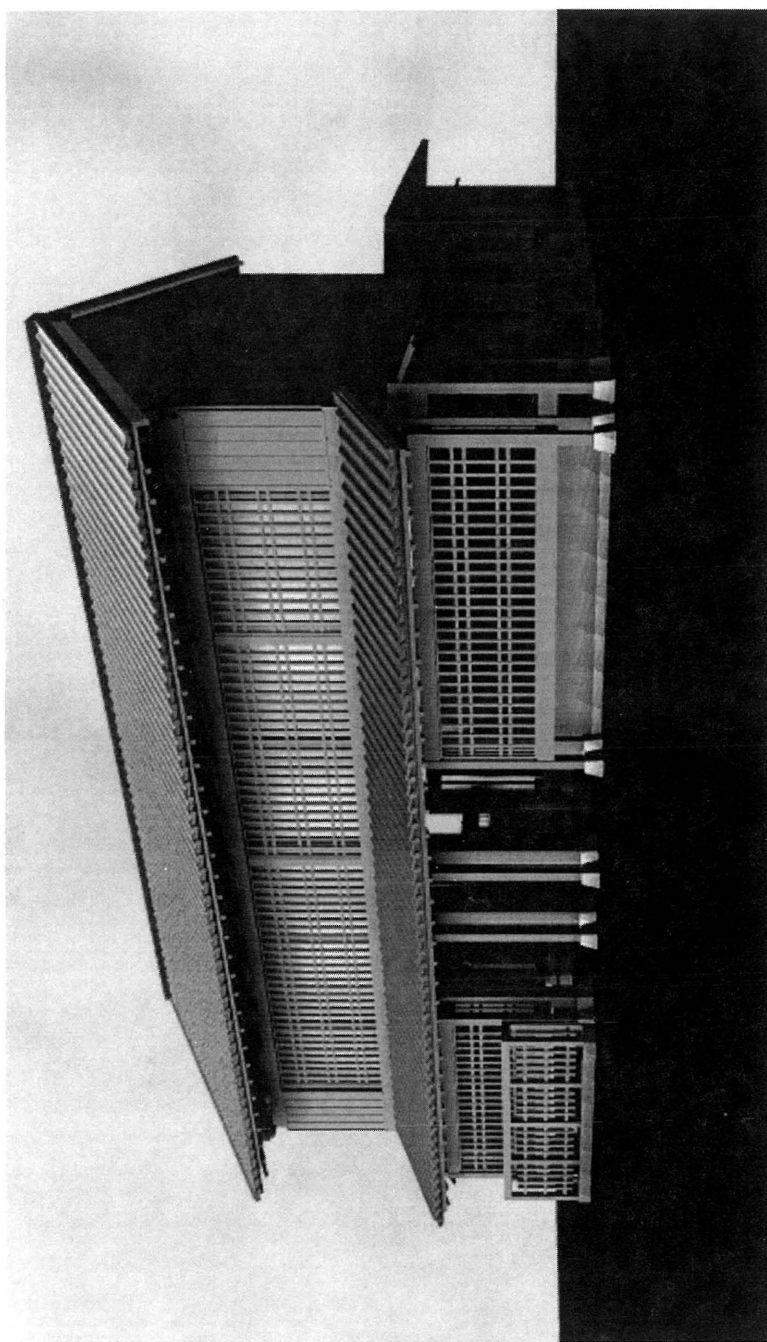
図面 3 〈江戸湯屋〉 1階と2階の重層関係図（黒ベタの部分が2階）



図面 4 〈江戸湯屋〉1階空間アイソメ図



図面 5 〈江戸湯屋〉 外観透視図（正面）



図面 6 〈江戸湯屋〉外観透視図（正側面）（以上、図面はすべて筆者作成）